Japanese Association for Religious Studies

れていた。

ロランの中に、芸術への愛好と自己の精神世界によってすでに存在していたにせよ、彼の存在を支配していたのは、イデアリスムスへの姿勢である。イデアールの世界の極限に位置すると同時に、世界内在的に、彼にとっての神、宗教がある。倫理や道徳も、宗教との緊張ある連続性の中に位置づけられ、この点、フランス社会に政教分離をもたらしたライシテの唱道者J・フェリーなどの姿勢と異なる。デカダンスの支配するフランスで、このようなイデアリスムスを認知させ、それへの積極的な傾斜をもたらしたのは、ロラン自身の資質と一貫して変わらぬ、ベートーベンを筆頭とするドイツの形而上学的・宗教的な文化世界である。

すでに幼少から親しんだピアノの技巧と音楽への愛着によって、音楽が、彼の存在と不可分に結びついている。絵画よりも、またその読者が知的な階層に限定されるという理由で、その芸術的な普遍性に限定が設定された文学よりも、音楽は、ロランの存在、精神と肉体の全般に関わっている。文学に対する音楽の芸術的な優位の根拠は、文学は文章や推理のディスクルシーフな性格に依存するが、音楽は直接他の心情との内面的な交流が可能である点にあるとされる。「音楽は詩よりも内面的で、感情の直接的で深い表現である」。音楽は、精神の深い層に触れているので、「歴史の内面的理解や人間の思考の密かな動きを認識するのに有用である」。古代のギリシャで完成を見ていた、詩と音楽の統一を、ルネサンス以降の近代において、ドイツやフランスの中にではなく、イタリア・オペラの中に検証しようとし、その意味で、ニーチェと同じく、R・ワーグナーを評価する。

民衆への接近と社会主義―ロランの社会主義へのシンパシーは、先行するイデアリスムスへのシンパシーから見て、異質なものと受け取られがちであるが、その伝記を発表したJ・ロビシエが言うように、内容的に連続している。オペラの発生とその展開の歴史を民衆とその担い手となる貴族との緊張の中に見ているが、民衆への視線を自覚させたのは、この演劇である。

最近のハーバーマスの宗教論について
――世俗倫理と宗教倫理の間――

後藤正英

過去十年ほどのハーバーマスの議論を振り返るとき、まず気づくのは、宗教に関する言及が数多く見受けられるようになったことである。その理由はどこにあるのか。ハーバーマスはどのような観点から宗教を問題にしているのか。今回の発表では、ハーバーマスの最近の幾つかの論考を中心に、彼の宗教への関心の在り処を明らかにしたい。さらには、今日の世俗倫理と宗教倫理をめぐる論争の中でハーバーマスの議論がどのような位置づけをもつのかについても考えてみたい。

近年のハーバーマスの議論を振り返ろう。ハーバーマスは、同時多発テロ発生後一カ月を経過した二〇〇一年十月一四日に、ドイツ書籍協会平和賞の授賞式で「信仰と知識」という講

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

演をおこなった。二〇〇四年一月には、ハーバーマスとラッツィンガー枢機卿（現在のローマ教皇ベネディクト一六世）との間で、理性と宗教についての対話がおこなわれた。その後に出版された『自然主義と宗教の間』や『ああ、ヨーロッパ』には、宗教に関する諸論考が収録されている。直近では、若き日のロールズの宗教論に注目した書評的論文も存在する。

さて、このような彼の最近の仕事に通底する問題関心は、近代化し、世俗化が進行する社会における宗教の重要性という問題である。今日では、近代化を脱宗教化という意味での世俗化と単純に同一視することができないことは自明となった。ハーバーマスは、近年「ポスト世俗化」という言葉を使用するようになっているが、この表現は、右で述べたように、世俗化の進行によって宗教が衰退するという定説が通用しなくなった今日の状況のことを指している。ハーバーマスは、ポスト世俗化の時代においては、宗教的市民と世俗的市民が、立憲民主国家の基盤の上で、相互に学びのプロセスに入らなければならない、と主張する。この学びのプロセスは共同作業でなければならないわけだが、特に世俗側には、価値多元主義の世俗倫理に宗教的テーマをどのように接合していくべきか、という問題が発生することになる。ハーバーマスは、宗教の道徳的直観を尊重したうえで、宗教の遺産を抹消することなく世俗の言語へと翻訳していくプロセスを重視している。

ところで、ハーバーマスの最近の議論の中で注目すべきは、ヤスパースの軸の時代（枢軸時代）をめぐる議論に言及している点である。よく知られているように、ヤスパースは『歴史の起源と目標』の中で、紀元前五百年を中心とする前後数百年の間に、その後の人類の精神文化に決定的な影響を与えた転換が発生したという解釈を提示した。これが軸の時代である。ヤスパースは、軸の時代に注目することで、二度の世界大戦がおこり冷戦が進行する状況下で、西洋中心ではない仕方で人類を結びつける基盤を歴史の中に求めようとした。もちろん、このような文明論は、大づかみの議論に過ぎる点が絶えず批判の対象となってきた。しかし、二一世紀になって、欧米中心の世界から多極化された世界へと移行しつつあることから、ヤスパース流の議論も再検討されるに至ったといえる。ハーバーマスは、軸の時代の議論の中に、今日のグローバル社会でヨーロッパ中心主義を超えた仕方で人間性を論じる手掛かりがあるかもしれないことに注目しているのである。さらに、ここで指摘したいのは、ハーバーマスが軸の時代に注目する理由には、価値の多元性や文化の多様性のみならず、ヒューマニズムや倫理の問題が存在することである。ハーバーマスは、倫理を強調する際に、ニーチェ・ハイデガーではなく、ヤスパースの哲学史観の方を評価する。ハーバーマスは、デリダと宗教の関係について論じた講演の中でも、ハイデガーとデリダが多くの類似点をもつにも関わらず決定的に異なる点はヒューマニズムと倫理を目的としていたかどうかにあった、と主張している。

NII-Electronic Library Service